住井すゑとその文学の里（三十六）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員　栗原（くりはら）　功（いさお）

牛久沼のウナギと犬田一家
ー『うな丼』の元祖は牛久沼のウナギー

文人画家（南画を描く画家を指す）小川芋銭は大正15年（1926年）に『茂りけり草の鰻（うなぎ）にならぬやつ』という俳句を詠んだ。

その牛久沼のウナギを新地の人が時々、犬田家に売りに来て、庭先で素早くさばいてくれたのを炭火であぶり甘露煮にしたそうだ（長女かほるの話）。

話は少しさかのぼって、江戸幕府徳川第11代将軍家斉（いえなり）治政下（在職は天明6年（1786年）から天保8年（1837年））のことであった。江戸伊勢町（現在の中央区日本橋付近）に大久保今助（いますけ）という人物が米会所（こめかいしょ）（米商組合の集会所兼米相場取引所および手形引替所）を構えていた。今助は、宝暦7年（1757年）に常陸国久慈郡亀作村（現常陸太田市）の農家に生まれて、13歳の時に江戸に出てきた。内藤紀伊守の家中として仕え、江戸随一の人気歌舞伎役者2代目瀬川菊之丞の衣装番を経て、米問屋、米相場取引と手形引替などの商いで巨万の財を成した。

今助が60歳を迎えた文化14年（1817年）ごろ、生家での所用のため江戸をたった。…水戸街道を一路下って、下総（しもうさ）国相馬郡の藤代宿（小貝川寄りの宮和田宿と併せて藤代宿を構成。現在は取手市に帰属）に着く。小貝川宮和田の渡し場で舟に乗り、対岸の常陸国河内郡小通幸谷村（現龍ケ崎市）に渡った。ここより常陸国で、水戸街道は若柴宿に達し、西進して牛久宿に入るのであった。が、若柴宿を通らないで渡し船で牛久沼を横切る方がずっと近道であった。今助は、八間堀土手の上を進み、稗柄村（ひえがらむら）（現龍ケ崎市）のせき（八間落し）付近の茶屋に着いて渡し船が出るのを待った。茶屋では、飯（めし）と牛久沼のウナギ料理も出していたので今助はそれをおかみに注文した。出てきた飯とウナギのかば焼きを食べようとしたところに、「船が出るぞ！」と、船頭の声が聞こえた。今助は、とっさに丼と皿とはしを借りていくことにした。丼に盛られている飯の上に、ウナギのかば焼きののった皿を逆さにかぶせて、そのまま皿をふたの代わりにした。そうして手持ちのふろしきで包み手でぶら下げて渡し船（さっぱ船）に乗った。（今の時間にすると10分余りで）河内郡城中村根古屋坪の渡し場に着いた。船を下り、渡し場の森に置かれている縁台に腰を下ろし、丼のふた（皿）を取ってウナギのかば焼きと飯を食べた。これが空腹だったこともあって大変うまかった。

江戸に戻った今助は、時々、ウナギ料理屋に丼飯の上に蒲焼をのせてたれをかけるという特注の出前を頼んだ。これが略称「うな丼」と呼ばれ、もう一方の深川の漁師が食べた「深川丼」（深川丼は江戸＝東京深川辺りだけ）とともに丼物の代名詞として、江戸八百八町の庶民に広まった。

玉子丼、親子丼、かつ丼が世に登場するのは、明治5年（1872年）1月に『天皇陛下さえ牛肉を召し上がられた！』というニュースが伝わった以降のことで、物によってはかなり後だった。

↑牛久沼渡し場の森跡—牛久市城中町字根古屋地内。江戸幕府徳川第3代将軍家光（いえみつ）治政下の寛永11年（1634年）に現在の牛久沼の南西側に所在している2000間土手が築かれた。築堤工事を担当したのは時の関東郡代（関東地方の10万石以上の幕府領を支配した役職）伊奈忠治だった。それからすぐに牛久沼に渡し舟が設置された。渡し場の森跡の樹齢を重ねたシイ、ケヤキ、モクズキ、桜の立ち木が往時の面影をかすかに残している。—

牛久市は水府村（現常陸太田市）と姉妹都市提携

牛久市は大久保今助の出身地常陸太田市と姉妹都市の提携をしている。そこでそれに至る経緯を簡単に記述しておくことにする。そもそも大野正雄牛久町長と平山嘉郎水府村村長が親せき関係にあって、両者の親せき付き合いの中から市制施行直前の昭和61年（1986年）5月に牛久町と水府村との姉妹都市盟約の締結となったのだ。平成16年（2004年）に水府村は、常陸太田市、里美村、金砂郷町と大合併。その新制常陸太田市と牛久市との間で、平成19年（2007年）7月開催のかっぱ祭りに際し、市役所敷地内に設けられたメインステージで、水府村と牛久市の交流を引き継ぎ、両市の親善関係発展のため、「姉妹都市交流に関する提携」の調印式が行われたという次第だ。